



三齋流
九曜会だより

発行

三齋流九曜会

会長 小林祥泰

事務局 出雲市今市町53



宗浦家元様の御献茶



護光様玉申奉奠

莊嚴な神域につつまれて
三十周年記念 龜山茶会を開催
細川護光様(ご)夫妻をお迎えし
平成二十八年九月十二日(日)



北島国造館正門

三十周年記念

「龜山茶会」会記の一部

床 後陽成院家輪深草切 和深朗詠集(下) 鶴傳書里六行	浪茶席(北島国造家書院) 唐担古直門	花 入 古銅 時季のもの 仁孝天皇所用中啓 舞鶴絵一匹の内 仁孝天皇御(北島国造家書院)第七十五世 北島公馬(下)贈 北島公馬(下)贈	風 爐 朝群 歌足遊環	釜 形水草紋 水月蓋(時川法眼下啓) 孫五郎造	茶 入 古備前 烏帽子 高取耳付 不昧公箱 白地染山蝦子 不昧公より北島国造家秋納 古萩 雪台公箱	茶 杓 松露摩子造赤 常陸宮西殿下御未始記念 不昧公御作 共筒 北川老	御 茶 蓋置 青磁 雲鶴 松向の昔 祝箱 御 菓子器 安南写片口	御 菓子器 安南写片口	薄茶席(龜山茶会) 唐担 おんぼら会	床 堀内宗心宗匠 宗浦家元 合筆 富士画賛	花 入 ラオス籠 九曜紋造 立礼卓	釜 大磯羽釜 流地紋 免綴付	水 指 繪引 繪師 不東庵作	茶 器 松詩絵 黒 泰巖老師 知音庵 十二代 大崎長左衛門作	替 薩摩 秋草絵 沈香官作	茶 杓 宗浦家元作 北島建孝国造 魁	建 水 布地曲 蓋置 鶴足亀甲 川の裏 川端表完作	御 茶 神の里 九曜紋味噌飯 三齋公馬絵写 春慶塗	菓子 器 三齋公馬絵写 春慶塗	菓子 器 三齋公馬絵写 春慶塗
-----------------------------------	-----------------------	---	----------------	----------------------------	---	---	--	----------------	-----------------------	--------------------------	-------------------------	-------------------	----------------------	---	------------------	-----------------------	------------------------------------	------------------------------------	--------------------	--------------------

三十周年記念・亀山茶会
晴天のもと盛大に開催

平成二十八年九月十一日、三十周年記念となる亀山茶会が、出雲大社北島国造館で開催された。細川護光様ご夫妻にご臨席賜り、溝口島根県知事様をはじめ、県内外から多くの御来賓の皆様やお客様にお越しいただいたの記念茶会となった。

宗浦御家元による御献茶に続き、濃茶席、薄茶席、拝服席、点心席でそれぞれが趣向を凝らしおもてなし。来場者には、北島建孝国造様と宗浦御家元合筆の色紙「緑毛亀画賛」が記念品として配られた。記念茶会に相応しく、出雲の空は晴れ渡り、終日賑わった。

(六ページに関連記事)



護光様ご夫妻(奥書院・濃茶席)

第一回・亀山茶会を
振り返る

宗瑞宗匠と北島英孝国造様(當時)とのご縁がきっかけで始まった亀山茶会も、今回で三十周年を迎えた。

記念すべき第一回目は昭和六十二年九月十五日。宗瑞宗匠による献茶ご奉仕の後、北島国造家奥書院で濃茶席(大野社中)、亀山会館で薄茶席(奥社中・直門)が設けられた。当日は九曜会関係者の他、計四百名近い来場者で賑わった。

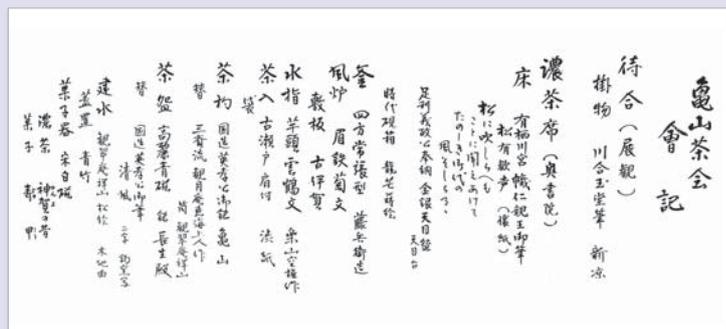
奥書院の床には、有栖川宮幟仁親王御筆「松有歡声」、足利義政公奉納の金銀天目茶筥等が飾られた。



金銀天目茶筥



宗瑞家元御献茶



第一回亀山茶会 会記の一部 宗瑞家元の直筆



右より英孝国造ご夫妻、上田宗箇流家元、宗瑞家元、小林文慶会長ご夫妻

名古屋城山八幡宮しろやまに於て

宗浦家元様献茶ご奉仕

岐阜聴雨会の茶席担当で

愛知県名古屋千種区の城山八幡宮で十月二十三日、宗浦御家元による献茶式が行われた。島根からも約三十人が名古屋入りし、三齋流御家元の城山八幡宮での初めての献茶ご奉仕に参列した。



本殿にて家元様御献茶ご奉仕

当日は、境内隣の「洗心軒」にて城山八幡宮の月釜「洗心茶会」が開かれた。薄茶席、拝服席、点心席を設け、三席とも三齋流・岐阜聴雨会の皆様を担当された。
名古屋の方をはじめ、約百二十名のお客様にお越しいただいた。



拝服席



本席



城山八幡宮

「城山八幡宮献茶式と
名古屋の旅」に参加して
大山社中 山根勝江

今回の旅は思いがけない地震の翌朝出発という、稀有な旅となりました。

有松竹田家の見学は絞りの展示会もあり、伝統の技のすごさや華やかさに圧倒されました。茶室でのお菓子は、私の地域と同じ「国の重要伝統的建造物群」に選定された時の記念の銘菓でした。夕食は家元のご両親のご配慮での「蔦茂」料亭の料の和食を堪能。翌朝、城山八幡宮献茶式の前に、岐阜聴雨会の皆様のおもてなしに溢れた、一服のお茶と栗きんとんの本場の味を満喫。献茶式は近郷の方や観光客の見守る中、厳かに進み感激致しました。直会も江戸より続く「八百彦本店」の味に感服し、徳川美術館の拝観もお宝づくし。

この度の九曜会行事に参加させていただき、企画の豊富さに多くのご尽力や下支えがあった事に、心より感謝致します。有難うございました。



有松絞り竹田家門の前で

先達探訪
三齋流の先生を訪ねて

昨年度からスタートしましたシリーズ「先達探訪」。三齋流の先生、諸先輩を訪問し、歩んでこられたお茶の道についてお話を伺うこのコーナー。二回目は、伊藤末子先生をお訪ねしました。

— 第二回 —
伊藤末子先生を訪ねて



伊藤末子先生

穏やかな日和に恵まれました二月最後の日曜日、我々広報部三名でお伺いさせていただきました。緊張しつつ家の前へ車を付けますと、社中の方に向かえ付けをいただいて恐縮。先生はじめ社中の皆様と一緒に迎えを頂き、またまた恐縮やら感激やらしながら早速お茶室の方へご案内頂きました。

いみじくも伊藤先生、二月十六日に満九十三歳の誕生日を迎えられたという事でした。真つすぐな姿勢に着物姿がとても素敵で、我々がびっくり、こちらが恥ずかしいようでした。

お床には、祥山宗匠から伊藤先生に送られたお手紙を包装したお軸が掛けられていました。正月にご主人とお茶を飲みにお越しください、という内容で、柚子の絵が大きく描かれたお手紙です。



他にも祥山宗匠との思い出のお道具、飾りつけで、祥山宗匠に見守れている様な気持ちになりました。お点前でお抹茶を美味しく頂き、先生と宗匠との出会い、お稽

古の事等々、懐かしくお話し頂きました。

先生にとつて、宗匠の思い出の中で最も大きなものは、とても可愛がつて頂いた事。「特にしかられたという事はなく、ただただ可愛がつて頂いた思い出しかない」と繰り返しておっしゃっていました。また、大田から(仕事の都合で大田市にお住まいになつていた)稽古に通つていらつしやる時は、汽車で一時間かかる間、稽古で習つた事、聞いた事はすぐに帰りの汽車の中で一心不乱に書きとめて帰つていた事等々、お話し頂きました。

我々が伺いする為に、当時のお茶会の写真から、入門から中伝までの許状までご準備頂き、一緒に懐かしく拝見させて頂きました。

最近ではボランティアで、社中の方と立礼席でのお点前で福祉施設の利用者の方にお茶を振舞われ、とても喜んでもらえたとおっしゃっていました。また、先生は短歌もよく作られ、その時の様子を詠まれた短歌が、山陰中央新報(平成二十九年四月二十一日付)に掲載されました。

「茶席持ち施設の人等とたのしみを分か合ふとき表情よろしき」
毎年、社中の皆様が伊藤先生の誕生日会を開かれているそうで、

その時に、先生が社中の皆さん一人ひとりを思ってそれぞれに詠んだ短歌を色紙に書いてプレゼントされるそうです。「社中の皆さんにとつても恵まれました。私の方が教えられることも多く、皆さんに感謝しています」と繰り返しておっしゃっていました。

今回、訪問させて頂きお話を伺う中で、お茶という出会いが人生をどんなに豊かにしているだろうと改めて実感致しました。そして、伊藤先生と社中の皆様が互いに心の底から信頼されており、とても仲の良い家族の様に感じ、私も心が温かくなりました。

最後に、先生と社中の皆様にご協力頂きました事、心から御礼申し上げます。有難うございました。先生の益々のご健康をお祈り申し上げます。

(広報部・加儀信子)



伊藤社中の皆さんと一緒に

茶席の本意

和田 貞夫

◆「薫風自南来」

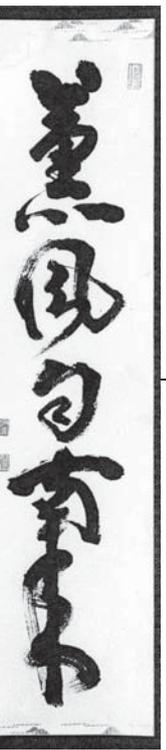
先日、出雲大社大茶会に参席し五月晴れの新緑に映える神苑の三齋流担当の茶席にて、美味しく一服頂いた。

席の正面床には、観翠庵祥山宗匠揮毫の「薫風自南来」の掛軸、兜型の釜、季節の花等、いずれも新緑の初夏にふさわしい季節感にあふれた道具の取り合わせがなされておられ、席担当の温かい気配りが感じられ、清々しい気持ちで初夏を満喫した茶席であった。

絵画には健筆をふるわれた祥山宗匠であったが、一行物は珍しくこの軸は初めての拜見であった。軸に書かれている文語は、唐の文崇皇帝に対して文人の柳公権が贈った詩、

「薫風自南来 殿閣生微涼」の一節で、初夏に吹く爽やかな南風が宮殿に快適な涼しさを運んで

くれているという、実に初夏の茶席にふさわしい一行物の掛軸であった。



近年、茶席を引き締め、雰囲気づくり、必要とされる掛軸であるが、津田宗達や嫡子の宗及の時代の茶席では掛軸のないことが多かったと言われている。

元来、茶道具の主役は、近き道具の第一が茶人・茶碗、第二が水指・建水、第三は茶杓、第四が火箸等とされ、遠き道具の第一が花生・釜、第二を絵文字とし、掛軸は違い物の第一とされていた。千利休の口伝中にも掛物は、違い物として扱われている。

それは掛軸自体が一つの主体性・意味を持つるので、茶席を一つのテーマで演出しようとする時に、茶席の主体性・テーマが二つあつては困るからである。しかしながら、時代が進むに

従つて掛軸は、茶席の雰囲気づくりを演出する大切な道具として、重要視されるようになっていった。それにしても、祥山宗匠の掛軸は、初夏を迎える茶席の雰囲気づくりを見事に演出する、一行物であった。

余談であるが、昔は法語や和歌など字数の多い細字の掛軸が多かったが時代が進むとともに、簡単で字数が少なく読みやすい太字の一行物が多くなっていった。それは学問の深い人が茶席に多かったのが、しだいに学問の浅い人も多く参席するようになったので、読みやすいようにとの配慮からだという話を聞いた事があるが、さて真意の程は。

◆茶席の主役

よく茶席担当者から、席を設けるに当たつて一番悩むのは、茶道具の取り合わせだと言う。毎度同じ物でなく、季節にふさわしい、客の喜ぶ、珍しい道具をと、あれこれ道具揃えに苦労するのである。この悩みは、席を担当する者の普通一般的な心情であろうと思うが、世間ではこれを道具茶だとして、批判する声もある。

千利休は、ある人からどんな茶席がよいかと聞かれて、「茶席は、華美にならず万事控え目に茶事を行うべし」と答え、次のように詠んでいる。

釜一つあれば 茶の湯はなるものを よろずの道具を好む はかなさ
有らば有り 無くば無きをば そのままに する茶の湯こそ 素直なりけり

◆松平不昧の茶の湯

松平不昧は、二十歳の時に書いた茶書「むだごと」の中で「茶の湯は湯を沸かし、茶を点てるばかりなれども、その本を知るべし。茶の湯は一心を修め慎み、清浄潔白を本とし、一和の業を成すことなり。是をもつて治むる時は天下国家を治める助となるべし」と、強い精神論の茶の湯を説いているが、不昧の茶の湯への姿勢に対しては、文化人・茶人としての高い評価と藩主としてのあり方に対して歴史家の厳しい評価もあり、賛否両論がある。

先年、出雲文化伝承館の館長室に松平家当代御当主（十五代）の松平直壽公が、突然筆者を訪ねてこられ、びっくりしたことがある。伝承館では、かつて不昧公展や御当主の講演をお願いしたことがあり、松江に來たので寄つたところであった。

四方山話の中で「島根の歴史学者どもはけしからん。不昧が多く茶道具を購入して領民に迷惑をかけたと述べているが、あれは殿様のポケットマネーだ。少しも領

民に対して迷惑をかけておらん。」

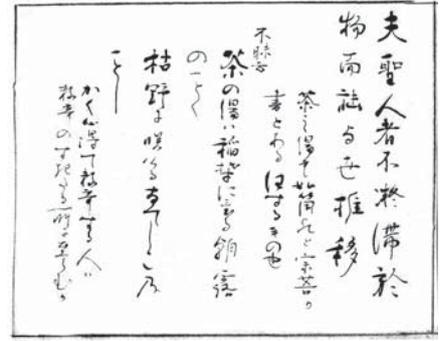
とのお叱りの言葉があつた。松江藩六代藩主松平宗衍の時代には、年収の三倍に当たる約五十万両の莫大な借財があつて藩財政は破産寸前の危機的な状況にあつた。宗衍は責任を取つて隠居し、七代治郷（不昧）が十七歳の若さで藩主の座に就く。

混迷する藩政の中、国老の朝日丹波は、経費の削減・税の増収・新田開拓・産業興隆等の大改革を強引に決行し、藩政再建に尽力した結果、財政は好転し江戸後期の各藩の中でも、松江藩は有数の裕福な藩となつていくのであつた。不昧の茶歴は、青年期の茶と晩年期の茶とはかなり違うので、前期と後期に分けて考察する必要がある。

◆「知足」(足るを知る)の茶

青年期時代では、経費節約をとの朝日丹波の練言に対し、「茶の湯は、知足を本となす。社会教化・治国の助となるなり。」と精神教化の茶の湯であつて、治国統制のために必要であると答えている。

「知足」(足るを知る)の文語は、老子道德経にあるもので「自らの分・相応のところ満足する」という東洋道德の重んずる徳目である。これに対して西山松之助氏は、「知足の論を茶道の本意とするの



不味筆 茶の湯の文

は、身分序列の厳制に跪圧する封建的人生観を自覚体得するための方便なり」と厳しく批判している。

◆不味の茶道具蒐集

晩年期に入つて藩財政は好転し豊かになると、不味の茶道観は変化した、次の名句をよく染筆している。

茶の湯は、稲葉に置ける
朝露の如く 枯野に咲ける
なでしこのように
ありたく候

心境の変化と同時に不味の茶道具蒐集が始まった。

二十歳台後半、伯庵茶碗を五百両、円乗坊肩衝五百両、喜左衛門井戸五百両等、二十四点を六千両で購入、三十歳台では油屋肩衝千五百両を始め十四点を四千両以上で買入れ、四十歳台では小倉色紙千両など六十四点を二万両以上の額で購入している。五十六歳で隠居するが、茶道具の購入は続き、

統計すると十萬兩以上の支払いがなされたとの記録がある。

不味による茶道具の蒐集は、天下の名器が散失するのを防ぎ、永く後世に伝えようとするものであったとする説が有力視されているが、また別に、幕府の大名統制策により各大名の財力消耗させるための圧力を警戒して、蓄財を茶道具に転化しておく隠れみのであったとの説もある。

江戸時代には、石高一万石以上の領主を大名と呼んでいるが、全国には三百余家の大名がいた。しかしながら、藩政にすぐれた実績を残して名君と呼ばれた藩主は数が少ない。

名君と知られている藩主は、肥後の細川重賢、米沢の上杉鷹山、秋田の佐竹義和、長州の毛利重就などが挙げられるが、残念ながら藩政史上の名君としての不味の名はない。文化人・茶人としての不味の功績には、多大なる賛意と敬意が表されているが、藩主としての不味には、郷土史家達の厳しい評価がなされているのも、これまた事実である。

しかし、不味は大名茶道の到達点を体現した大茶人で茶道史上、さん然と輝く功績を有する人物であり、島根を代表する歴史上の人であることは、衆人の認めるところである。

来年度、開催される「不味公二百年祭」では、県民あげてその功を称えたいと願っている。

◆「おらが茶の湯」を読む

この文は、近代財界人を代表する茶人として有名な高橋箒庵が晩年（昭和七年）に著わした茶書である。

箒庵は、三井財閥で活躍した後で余生を趣味に生き茶事を親しみ、幅広い和楽の生活を送った人で、文筆活動を通して茶の湯の啓蒙に大きな役割を果たした。

「茶の湯は本来趣味である。趣味として之を楽しめば、それでおらは満足する。本来、茶室は白紙である。その白紙の上に、おらがもつ茶の湯の常識と持つて生まれた自然の美感を生かして書画器具をもつて四季折々、吉凶慶弔、その他の趣向を現わし、茶題に適する一幅の茶図を書き出すのが茶の湯の趣味の骨子ではないか。茶道具は価格の高低ではなくて、使い方の工夫であつて、それが茶の湯の妙味である。」

この茶論に対しては、各方面から強い反発があつたが、精神教化論的な従来の茶の湯の考え方を一新する多角的な視点からみる茶論で一考を投ずるものであつた。

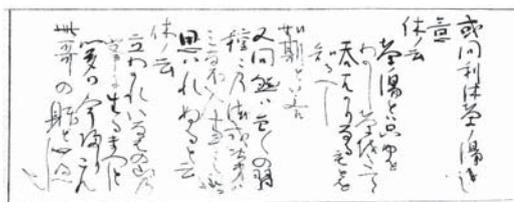
◆茶席の構成

茶席の場を構成するためには、次の三つの関係性が大切であると

言われている。

- 人と人の関係性
(主客の一体感の成立)
- 人と物との関係
(よく見て観察し、手に取つて楽しむ、感覚を大切に)
- 物と物との関係
(道具の取り合わせ、色彩的バランス、季節感と調和感の統一)

以上の三つの関係性の調和に、十分配慮して「利休七則」にあるように、決して華美にならず、花は野にあるように、夏はいかにも涼しく、冬はいかにも暖かく、炭は湯が沸くように置き、刻限は早めに、降らずとも雨の用意をして、その場にふさわしい爽やかな風情をつくり、相手の客に十分心して飲み加減のよいように茶を点てる、このことが茶席では一番肝要ではなからうか。



利休茶の湯の意

主客の一体感、意図的に無理をして迎合しようとするのではなく、おのずと自然に互いの心に叶うように雰囲気づくりを努めること

とによって形成される。

細川幽齋が、ある茶席に招かれたが、あまりにも過度な興の演出に対して、すべて何事も過ぎるところとはよくない、事足らぬところに風流があると、次の歌を詠んで静かに、たしなめたと言う。

清見瀉、雲もまよわぬ
浪の上に、月のくまなる
千鳥かな

(月光の美しさを隠すまいと雲でさえ、姿を見せないでいるのに、その月に影をさす)

出すぎる千鳥の心ないことよ
いろいろと多面的な論議はあるが結局、茶席の基本は、相手のお客に対して、きめ細かな気配りと暖かい思いやり、おもてなしの心を持つて接することが最も大切で、自然な主客一体の茶席の構成こそが本意とされるべきでは、なからうか。

◆追記

最近、急速に老化して至つて筆が進まない現状であるが、広報部から強い依頼でやむをえず、手許の茶書を読み、その寸感を綴つてみたが、残念ながら的を得ない拙文となり申し訳なく思っている。

結局、肩のこらない、気軽な楽しい茶の湯を皆で楽しみましようという事を、述べたかった次第である。

九曜会事業報告

〈平成二十八年七月～平成二十九年六月〉

○九曜会総会

平成二十八年七月十日(日)

ホテル武志山荘

担当 役員、事業部、直門(薄茶席)

平成二十八年年度総会が、ホテル武志山荘にて開催されました。

小林会長様、宗浦御家元のご挨拶に続き、二十七年年度の事業及び決算報告、二十八年年度の事業計画、予算書の審議が承認可決されました。米寿の会員の紹介とお祝い、今回新たに開設した三齋流九曜会公式ホームページのスクリーンでの紹介等がありました。午後は、出雲大社出雲国造・北島建孝様による「出雲と伊勢」と題した講演が行われました。



北島建孝国造様



米寿の祝福を授与された方々
辰村 栄様 杉原 昭子様
清水 幹子様 松本 すすえ様

○亀山茶会

献茶式・午前十時より

平成二十八年九月十一日(日)

【濃茶席】

北島国造館 奥書院

担当 直門

来客者数 一七二名

北島国造館に細川護光様ご夫妻をお迎えして、三十周年記念の亀山茶会が行われました。私は書院にて、濃茶席を担当させて頂きました。

床の古銅花入には酔芙蓉が活けられ、その白さに楚々とした趣を感じました。一席終った後、本殿にて家元様の献茶が厳かに行われ、その後、私達は水屋で服加減を思案しながら夢中でお茶を練っておりました。午後になり、ふと床を見ると、白かった酔芙蓉がピシクに変わっていて、張りつめていた緊張を解きほぐしてくれる様でした。三十周年という緊張の中にも、和やかさを感じるお茶会となりました。



茶席担当の皆様

【薄茶席】

北島国造館 亀山会館

担当 おんぼら会

来客者数 二一九名

おんぼら会は、中川会長を中心とした、今年で十五周年を迎える会です。家元様より亀山茶会三十周年のお祝いの茶会の薄茶席担当をと、厳しいお言葉を頂きました。平均年齢がもうすぐ古希という、お点前等殆どした事も無い会ですが、残された二ヶ月余りを、家元様・典子先生の特訓に特訓を重ね、さつき会・さくら会の支援を受け臨みました。それぞれが一生懸命にすることで、心が一つになる事が出来ました。

御来賓の皆様、お客様の暖かい応援を頂き、おんぼら会の面々の真摯な態度が雰囲気を感じ、拍手まで頂いた事は望外の喜びでした。



亀山会館の薄茶席

【拝服席】

北島国造館 庭園

担当 直門

来客者数 二三七名

今年、三十周年記念の亀山茶会として庭園に拝服席が設けられ、直門八名で担当しました。お点前は随時、盆点前をしました。「初めて見る点前」と見入っているお客様もいらっしゃいました。

当日は晴天に恵まれすぎ、風の通らないテントの内の水屋は高温となり、水分補給をしながら担当者一同、何とか無事終えることが出来ました。



本殿西側庭園での拝服席

○松江城大茶会

平成二十八年十月一日(土)・二日(日)

松江城山二の丸

担当 大田・米子・安来・野々村社中・加茂会

来客者数 一日 六六七名

二日 七四五名

「国宝が、お茶に染まる二百間」のキャッチフレーズのもと、三十三回目の松江城山茶会を担当させて

戴く事となり、大変責任を感じながらの準備でした。秋雨前線の停滞で毎日雨、準備の日も当日も雨で、まるで泥濘を歩いている様でしたが、沢山の皆様に入席して頂きました。

席に入った途端、茶席と軸・花の雰囲気がとてもシンプルで、一緒に野立てを味わっている様だとの好評を頂き、大変嬉しく感じました。また、他社中の方のやり方を学

ぶことが出来勉強になり、複数社中で席を持つのも刺激を受けて、良いものだと感じました。



松江城二の丸薄茶席

○一畑寺茶会

平成二十八年十一月十九日(土)

一畑寺 東陽坊茶室

担当 下垣・山田社中

来客者数 三三一名

第二十一回一畑寺茶会は、最悪の天気予報でしたが、予報を裏切り一席目から錦織りなす晩秋の茶会となりました。二百メートルの山にある東陽坊から見下ろす大自然の美しさは、お客様はもとより

我々を別世界に誘ってくれました。初炉、お点前は長板三段を披露いたしました。お菓子は、織部上用、他流との流れを気遣い二十分での入れ替えでした。待合との連絡等をして頂いた事業部の受付の皆さんの協力に、感謝したところです。歴代のお家元の道具に見守られながら、「随處作主」社中一同十二名は、与えられた役目を終えることが出来ました。



茶席担当の皆様

○出雲和文化まつり

平成二十八年十一月二十七日(日)

出雲文化伝承館 松籟亭

担当 加儀社中・大野社中

来客者数 三三六名

あいにくの雨模様にもかかわらず、沢山の方々においで頂き、また、お子様連れも多く、賑やかな呈茶席でございました。

「心清百事佳」というお軸を掛けさせて頂きましたが、どなたにもわかり易いこともあり、お子様達にも興味深く見て頂いたように

思います。特に、お子様達のキラキラした目を見て、和文化的の明るい未来を見る思いでございました。



松籟亭呈茶席

○三齋忌

平成二十八年十二月四日(日)

観翠庵道場 松霞亭

担当 山崎社中

来客者数 五二名

久し振りに三齋忌の濃茶席を担当させて頂きました。午前中はお天気も良く、お客様に気持ちよく過ごして戴けたと思いますが、午後は雨となりました。

此の度は「おもてなしの心」を念頭に、「おいしいお茶を差し上げましょう」「二手差し出す事をためらわないで」を心がけました。しかし、茶席を進めるなかで、コミュニケーションやタイミングの難しさを学びました。そして、「降らずとも雨用意」の心を、身をもって体験致しました。この教えを守って社中

一同精進することを誓いました。



茶席担当の皆様

【薄茶席】

観翠庵道場 富士の間

担当 佐藤社中

来客者数 六〇名

初冬の三齋忌「富士の間」の薄茶席には、法要前後の五席に朝山一玄師、宗浦家元を始め、多くの皆様に通り戴きました。

床には三齋公の「柿の文」、古小代の花入に土佐水木・磯菊を入れ、達磨香合と共に飾りました。

茶碗は高田筒、上野、小代と共に、長岡空権作祥山宗匠筆の立鶴の筒、これは、三齋公が將軍家光公からの拝領品「御本立鶴」に因む物。



三齋忌 富士の間 薄茶席

茶杓は三齋公の「黒鶴写」を仙台埋木で模した物、柿形薄器は宗浦家元直書の良寛の歌など、三齋公に関する道具組とし、流祖を偲ぶ茶席となればと考えました。

○早春の茶会

平成二十九年三月二十五日(土)

出雲文化伝承館 松籟亭

担当 今岡・杉山社中

来客者数 四三五名

冬の厳しい寒さを越し、やっと春らしくなった三月末、出雲の春の風物行事となった早春の茶会は二十五回記念を迎えました。この記念すべき年に担当させて頂いた事、深く感謝致しております。

当日は好天に恵まれ、木々や苔の緑の美しい松籟亭にて、宗育宗匠様をはじめ四百五十人近くのお客様を迎え、「社中が心を一つにして、無事に終える事が出来ました。大寄せの茶会では今年初めての茶会、そして早春の雰囲気を感じて頂ける

設えで、春を迎えた喜びを楽しんで頂き、好評で和やかな席となりました。



茶席担当の皆様

○新樹の茶会

平成二十九年四月二十九日(土)

【薄茶席】

観翠庵道場 書院の間

担当 大平・山本社中

来客者数 二三七名

古木が繁る観翠庵に立つ瀟洒な茶室は、新樹の季節を迎えて山居の趣があります。木漏れの日差しも優しく、和やかに迎えたいと、一同心を合わせて臨みました。

宗育宗匠、会長様はじめ先達の先生方、多くの方にお越し頂き、混雑もなく席入り頂いた事は喜びでした。事業部の協力で水屋方も安心、運び方もスマートに出来、静寂の内に日頃の稽古の成果が現れ、皆様に喜んで頂いた、いい一日となりました。

ご協力頂いた皆様に深く感謝いたします。



道場書院の薄茶席

三齋流九曜会だより

【薄茶席】 観音寺書院

担当 伊藤・杉原社中
来客者数 二二六名

新緑も爽やかな好天に恵まれて、恒例となりました新樹の茶会が、広く一般の方にも心待ちにされ、昨年の二十回記念より観音寺書院の方も薄茶席となり、より気軽に皆様にお茶席を楽しんで頂くように思います。

道場の席担当の方とも連絡を密にとり、お点前・お道具の取り合わせ等、御家元の指導を受けながら、お陰様で無事好評の内に終わる事が出来ました。

何よりも二人の先生方は九十歳以上ですが、お元気で席担当社中の私達をしっかりと、ご指導くださいました事を嬉しく、そして感謝の気持ちで一杯です。有難うございます。



観音寺書院の薄茶席

○松江春茶会

平成二十九年五月四・五日(木・金)
松江城山二の丸

担当 大田・米子・安来社中
来客者数 一五七名・一四七名

風薫る五月松江春茶会が城山で催され、米子・安来・大田社中が参加致しました。一席二十名の席が二か所設けられ、静かな雰囲気の中で、久しぶりのゆつたりとした進み具合で、迎える方もゆとりが持てた様に感じました。時季を迎えた「なんじゃもんじゃ」の花も、満開で色を添えてくれました。

弘前市から観光で来られた方が「出雲の方にこんなに丁寧なお点前がある事を知り、良い旅が出来た」と喜んで頂き、一同気持ちがいりました。知事様ご夫妻もみえられ最後の席を締め上げて頂き、何とか無事に終了しました。



茶席担当の皆様

○出雲大社大茶会

平成二十九年五月十五・十六日(月・火)
出雲大社神苑西

担当 辰村・福岡・沼社中
来客者数 四〇四名・三四八名

床には、祥山宗匠のお軸「薫風自南来」。時折、五月のさわやかな風が茶席を吹き抜け、穏やかな二日間となりました。

平日ということもあり、いつもよりお客様は少なかった様ですが、着物姿の外国の女性や、遠方より参拝においでになった方々など、ゆつくりと三齋流のお茶を楽しんで頂けたと思います。

お菓子の「新緑」は、この季節に相応しい味わいだと、好評でした。九曜会からもお手伝い頂き、三社中協力しあつて、無事にお茶会を終える事が出来ました。



茶席担当の皆様

○講習会

平成二十九年三月五日(日)
出雲文化伝承館 松籟亭

担当 研修部
参加人数 五六名

今年度も、山崎智恵子先生に説明をして頂いた上で、「二つ茶碗(主茶碗は筒茶碗)・棗は金輪寺・一閑人蓋置」の点前講習を行いました。「客ぶり」につきましては、大寄の茶会の想定で行いましたが、席による違いもあり、経験を積む事の大切さを教えられました。

午後はアンケートで希望の多かった「掛物」について家元様から講義をして頂きました。掛け方・しまい方・床の間とのつり合い・花とのつり合い等について、実習を交えて和氣満々の雰囲気の中で丁寧にお教え頂き、茶の湯の奥深さを感じた一日でした。



家元様から講義を熱心に受ける会員

祝・米寿おめでと〜いぞうします

今年度は 内藤 友子様一名

昭和五年生れ(山本社中)

☆末永いご健康とご多幸を

お祈り申し上げます。

編集後記

今号も皆様のご協力により、無事発行することができました。

巻頭には三十周年記念亀山茶会、三齋流としては初めてとなる城山八幡宮(名古屋)での献茶式、シリーズ先達訪問等を紹介、報告することができました。

担当の皆様方のお茶会当日の写真撮影をはじめ、茶席報告書等のスムーズなご提出無くして九曜会だより作成も成し得ませんでした。この場をお借りし、改めて心より感謝申し上げます。

定期的に広報部会を開き、より充実した紙面を話し合いを重ねながら発行準備を進めてまいりました。九曜会だより、ホームページ等、お気付きの点がございましたら、遠慮無くご意見をお願いしたいと思っております。

今後ともご指導、ご協力の程宜しくお願い致します。(加儀信子)